

# 万緑叢中紅一点

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校

二年

野口知香

黒い、小さな昆虫を殺す。古い家の立て付けの悪い窓から何回でも這い上がってくる虫。少数部隊で、大群で、単体で、列を成して。黒い体をてらてら光らせる数ミリ程度しかない虫を潰す。一匹ずつ、ぷちつと。手に残る少し生々しくて少し無機質な感触。もし彼らが人間と同じサイズ感なら陸上選手に勝るスピードで動き、アメコミヒーロー並の力があるのだろう。だけど彼らは小さいが故に、その命を呆気なく潰されてしまう。小学校の教科書でも、公園でも、彼らには会った。動画サイトでは大好きな砂糖にまみれて死んでいた。そんなことを考えながらわざと開けっぱなしにしたチョコミントに集る彼らを一匹一匹、そのつぶつぶを堪能しながら殺した。指の腹で押し潰して、爪の先で身体を引きちぎって。どうしてこんなにも丁寧に殺すのかといえば、前に群れを殺虫剤で殺したとき、後始末が面倒だったから、とか、小学生の頃、足で踏み殺そうとしても潰せていなくて、普通に生きていた、とかで、大した理由もない。一匹ずつ、その粒を

味わいながら、小さな身体の命を奪い去る。途中、蠢いている感じもする。

「やめておくれ、私はまだ働かなくては」

なんて言って死を拒絶している気がして、気持ちが悪い。

死ぬ前の彼は、私の、

「そんなに根詰めなくてもよくね」

という質問に、

「女王が、子供が、私の帰りを待っているのです。だから、だから、なのです」

と答える。

「たった一匹、大勢の中の普遍的な一匹、いてもいなくても変わらんっしょ」

「私一匹でもかけてはならないのです。『千里の堤も蟻の穴から』とか言うでしょう」

彼もまた、私の指先で息絶えた。指をパツと離すと、縮んだ彼が床に落ちた。指先には彼の生きていた証の彼の体液が着いていたからティッシュで拭って彼も拾って。

彼以外もたくさん殺したところで、腹が減ったので飾っていた百合の花弁を一枚食べた。花瓶の水を飲んだ。そして何となく買ったアルフォンス・ミュシャの画集を開いた。白い、一枚花弁の欠けた百合と、本の中のポスターの「遠い国の姫君」をぼうっと交互に見ながらそのシーンの私は暗転した。カーテンは閉めていたし、時計はフライパンで焼いた。それにテレビもつけていなかったからどのくらいの時間寝てい

たか分からないけれど、目覚めたら茶色に枯れた首が目の前  
にあつて、さらにそこに小さくて黒いものが集つていた。

何気なくカーテンを開けてみた。影は短いからまだ昼過ぎ  
だろう。Tシャツ一枚は物足りなかつたから青いパーカーを  
着た。そして私は時間が存在する世界へ踏み出した。

私は平然と人の群れの一部となつた。私もまたこの社会の  
一部となつた。ふと足元を見ると素早く動くひとつの黒。生  
きるのに必死な集団行動をする生だ。なんだか腹がたつたの  
で私はいつものように彼をつまんだ。

「あんたもまた、働きまくってんすね」

「そりやそうですよ。働くことは生きること。私は歯車の一  
部なんです」

忙しく足をバタつかせながら彼は言った。

「休めば」

「休めません」

「休めよ」

「無理です」

「死ぬかもよ」

「死んでも、死ぬまで働きます」

私は彼を口に含んでみた。舌の先を唾液にまみれた彼が這  
いずりまわる。背筋が泡立ち背徳感に心が踊る。万が一喉の  
奥にはいられると困るので喉は舌で塞いだ。口内を蠢く小さ  
な身体。彼は小さな身体で歯の隙間に入り込む。

「ここは一体どこなのです」

口内に閉じ込められた彼は言う。先程の言葉が本当ならば、  
彼はこの閉鎖空間でも死ぬまで働くのだろうか。小さなつぶ  
つぶを舌の先で味わう。狭い世界からさらに狭い世界に閉じ  
込められ、彼は一体どこを見ているのだろうか。彼らの瞳に  
世界はどう映るのか。

口内に彼を閉じ込めたまま、繁華街へと入る。私も社会の  
一部となる。マイノリティからマジョリティへの変貌。彼は  
道中もこの暗闇から脱出しようとしたが、飴玉のごとく私の  
舌先に押し戻される。大きな交差点だ。背広のおっさんに制  
服のJKへ女子高校生。流行りの服を身にまとった女達に口  
マンスグレイのおじさま。ビルについている時計を見ると午  
後四時を指していた。

百貨店のトイレの個室に入った。便器に腰かけ彼を乗せた  
舌を突き出した。舌先を唾液まみれの彼が蠢く。後ろめたさ  
に口角が歪む。

私は彼をつまみ上げた。足を一本一本丁寧にちぎり落とし  
た。小学校で習つたように三つの部位に分けた。トイレット  
ペーパーの上に元通りに並べて水に流した。

トイレから出て、花屋に向かった。花屋には色が沢山ある。  
まるでプリズムから創造される世界のような。様々な色を反  
射して、個々がきらめいている。同じ種類でも一本ごとに色  
味や大きさ、葉の付き方等が違つたため、同じものはひとつと  
ない。

私は白い薔薇を二輪買った。帰り道ではまた私は群れの一

部であったが花たちはそれでもなおきらめいていた。

家に帰るとこの二人も私色に染めてやりたくなくなったので幼稚園の頃のマーカーを取り出した。芯を抜き出しグラスの水を染めた。そこに生けて私の目の前は真っ白になった。

私の夢は目の前で落ちていた。二人とも。机上の夢をしまつてあげたいのだけれど無理だった。白の時は入っていた。しかし目の前の夢はどうしても入ってくれない。落ちていく。試みる度落ちていく。

むしゃくしゃしたので花卉を引きちぎって体内に入れた。華やかで煌びやかな香りが口内に満ちた。花卉は全て食べてしまった。グラスの中身も口に含んだ。ちょうど目の前にまた例のごとく彼がいたので私のグラスの中に突き落とした。冴える青と醜悪な黒のコントラストが網膜を刺激する。茎で渦潮を作り黒を中央に流す。黒は自分なんて持たずに流される。またもう一匹居たので彼もまた同じように渦潮に取り込ませる。

回すことに飽きたので彼らを一匹一匹壁になすりつけて殺した。脆い体はいとも容易くプツリと分断されてしまう。

「普通に生きてきただけなのですが」  
「言われたままに、教えられたままに、生きてきたのですよ」  
彼らもまたそう言った。

幕はおもむろに開いた。果たして今は何月何日何曜日何時何分なのか全く分からない。もちろんテレビはつけていないしカレンダーは風呂に沈めた。だから、分からない。

カーテンを開くと活気と徒勞を感じた。多分朝なのだろう。ザクロの実のようになつぶつぶが行き交う。細かい粒たちが紅くて丸い箱に閉じ込められている。(※<sup>1</sup>)深成岩の(※<sup>2</sup>)等粒状組織とは違って、酷く狭い限られた空間に、息苦しくなるほど詰められている。多分いつか破裂すると思う。鳳仙花みたいに。

黒の無機質を感じながら思う。私はザクロの果実そのものでありたいと。ザクロの果実に内包される粒ではいたくないのだ。結局何個入っているのか分からない、一つ二つ減っても気づかれない存在。それではダメなのだ。でも実際はそうだが、いつもいつも私に消されてしまう彼らなんて、一匹減ろうが二匹減ろうが代わり映えしない毎日を他の個体は過ごしている。今日もまたガタガタなる窓から彼らは侵入してくる。列を組んで、はぐれて、群れながら、フリーダムに。彼らは等しく働き、忙しく毎日を過ごす。

ザクロの果実達は彼らと相似の関係にある。両者ともに同種類のものとは合同の関係で、別個体どうしでもまた相似の関係となる。つまり、タイトスカートも大きなリュックの坊主頭も、茶色のランドセルも縦縞スーツも全てが全て合同なのである。全てが全て方程式を成立させる。どれもがつまらない存在だ。私は瓦に伍することを潔しとしない。絶対に嫌だ。私は輝いていたい。磨かれた珠でありたい。

部屋に視線を戻した。黒の軍隊は今日もまた老人の窓から挨拶をする。潰した。ちなみに彼らの私への挨拶はいつも決



はない。ダイヤモンドと黒鉛、<sup>(※5)</sup>フレーラン、<sup>(※6)</sup>カーボンナノチューブ。主体の私はダイヤモンドが良い。嘘だ、なんでも構わない。

また世界が開いた。<sup>(※7)</sup>シュワルツロツトゴルドのシュワルツのような生物を観察した。彼らは彼らの任務を着実にこなしていく。個々で、まとまりで、選抜メンバーで、団体で。私たちと限りなく合同で合同でない。つまり相似であり、そのためにか妙な温もりを感じた。観察していると珍妙な生物であると思った。行動に規則性があるのに規則性はない。彼らは世界中広く存在し、たくましく生をつむぐ。彼らは特殊生物であり、私たちとは方程式をなさない。赤の個室を開くと有彩色の彼らが詰まっている。

一方の私を開いて見えたのは透明であった。誰にも見つけて貰えない。大きさでは彼らより大きくても、彼らより音を発することが出来ても。なんとまあ開いてみると無色透明無味無臭。

白ではないから染まらない。黒ではないが染まらない。染まらないけれど透き通り、すり抜けていく。

すり抜けた<sup>(※8)</sup>リパーブが語る。鏡でないから反射はさせないが反響させる。その反響はいつしかなりえないはずの<sup>(※9)</sup>ドップラー効果を生み出した。重なり合う音は私で重なるってくるものも私。私が形成されていく。

わけがわからなくなっているうちに目が覚めた。腹が立つほど清々しい朝で。珍しくカーテン開けてたんだなあ、など

と思いつながら冷蔵庫を開けた。黒いものは一つも入っておらず、普通のヨーグルトを取り出したのだ。カロリー控えめのヨーグルトだ。建て付けの悪いドアにはいつのまにか油がさしてあったようで、滑らかに開閉できるようになっていた。私は今まで何をしてきたのだろうか。ここ最近の記憶が一切ない。じわじわと違和感が私に近づいてくる。ここは私の家なのか。「私」は私なのか。このドアは誰が油をさしたのか。このヨーグルトは誰が買ったのか。冷蔵庫の元々の中身はどこに行ったのか。今着ている洋服にも違和感があった。私は外でも中でも着れる服しか基本着ないし、そもそも持ってない。なのに今きているのは十人中十人がパジャマと答えるような洋服だ。つまりパジャマだ。

クローゼットを開けた。ここには洋服は入っていなかったはずなのに、お出かけ用とでも称されそうな洋服がたくさん入っていた。不安になってとっさに後ろを振り返るとフライパンで焼いたはずの時計が、そこにはあった。

これは悪い夢だ。早く覚めよう。そう思って自分の頬を力一杯殴ったのだが、痛いし鏡には赤く腫れた頬が見えただけだった。ちよつと待て。私は鏡も持っていなかったはずだ。なぜなら、買っていなかったし洗面台についていたものは金槌で碎き破ったからだ。なのに今自分の目の前には鏡があり、長らく見ていなかった自分がそこにいるのだ。ボサボサの髪の下に、不安そうに眉を寄せた、そんな自分がいたのだ。どうしてしまったのだろうか。もう一回、今度は自分のスネを思

いつきり殴った。またもスネと拳が痛いだけであった。どうしようか。外に出ようか。そうしていると玄関の開く音がした。「ああ、忘れ物をしちゃったよ！ 危ない、危ない」

入ってきたそいつは私を見て驚いた。

「目が、覚めたんだね。心配したんだよ。ほら、いつまでもそんな格好してしないで着替えて着替えて。朝ごはんヨーグルトで足りた？ まだ食べたかったら昨日の肉じゃが、食べていいからね」

そう言つて、また出て行ってしまった。昨日の肉じゃがつてなんだよ。そもそもお前は誰なんだ。私はお前のことなんて知らない。だからお前も私のことを知らないだろう。知っているはずもない。私はついさつきまで一人であれを潰すことしかできなかった人間だ。私はこんな月並みな生活は送ってきていかなかった。そうだろう？ ああそうだ。つまりこれは、こんな生活は、夢だ。夢？ だけれども殴つても殴つても痛いだけだった。つまりこれは夢ではない。いや、夢だ。私は認めない。私の生活じゃない。こんな平々凡々な生活なんて！ 私はただの緑じゃあ、いけないんだ。私は紅くなければならないんだ。私は尋常一様ではなく、優秀な存在でなければならぬのだ！

そこで、鼻の奥がツンと痛むのに気づいた。顔の表面がじんわりと、じんわりと湿っている。頭も痛む。前を向くと、鼻を赤くした私がいた。

見慣れない天井に見慣れない鉢植えにシクラメンやアジサイ、果物、テレビ、シーツ、服、腕、チューブ。そして、私を覗き込む人、人、人。ある人は目を腫らしていたし、ある人は顔色がすこぶる悪い。白衣が走って部屋に入ってきた。何かを高速に捲し立てている。何言ってるかわからない。聞こえてはいるが、わからない。何が何やらでわからない。まあ、わからなくてもいいか。そんなことより、私の周りには、この人たちは誰だ。誰なんだ。

後からわかったことだが、まず第一に、周りの人たちは妹とほんの数人の私のことを覚えていてくれた人らしい。第二に、私は頭が狂っていると、家族から嫌われて、私も家族を嫌って、家を出たらしい。その時の私は「誰も私をわかってはくれないんだ！ 嫌いだ！ 嫌いだ！ 一般人め、こんな代わり映えしないような毎日、やってられるか！ ああ、希望通り、出て行ってやろう」とか何とか言つて、家を出たそうだ。なかなか、いかれている。ちなみに私はそんなこと覚えてもいない。そしてポロポロのマンシヨンの一室に住み着き、ヒソヒソと暮らしていた。そこでも気が狂ったような生活をしていたら栄養不足やらなんやらで数日間倒れていた。大家さんがそのマンシヨンを立ち退きを理由に取り壊そうとし、そこで各部屋を訪問したそうだ。何日も何日も返答がなかったので勝手に開けたところ、発見したようだ。(※10) 化学的風化をくらった(※11)造岩鉱物のような私を。

「大家さん、腰抜かしちゃったみたいよ」

私の妹と名乗る妙齡の女性が言う。一体どこまで酷かったのだろうか。

「おぞましいの権化だった、って」

ひどい話だ。妙齡の女性は抱腹絶倒していた。そうか、そうか、と相槌を打ちながら私は少し寂しく思った。どうして親は来てくれなかったのか、と。私とは音信不通だった妹は来てくれたのだ。だのに親は片方もこない。まあ、私の方も妹の顔も覚えていなかったのできつと親の顔なんて忘れたのだろうか。

妹は去って、一人になった。試験管のような腕にはチューブが刺さっている。点滴なのだろう。頭を留守にしていた。

何も考えない。先ほどまで散々眠っていたはずだが、まだ寝れそうだ。

「やあ、随分変わったね」

あの時のあいつが笑っている。

「誰だよ、お前」

大輪の花を咲かせて立っている。あの時と違うのは、嘲笑ってはいないところだ。こちらに好感を持っているかのようには笑っていた。

「ね、君には無理だって、言ったでしょ」

大輪の花は腐れにやけ顔に変わった。

「どうだった？ 一般人の生活！ 最高でしょう」

「クソ・オブ・ザ・ベストなんだけど」

「え、嘘だ嘘だ。絶対嘘」

得意顔でこちらを見てくる。

「だって君、実はそんなに普遍が嫌じゃなくなったでしょ」

心臓を貫かれた。事実、そうなのかもしれない。数日前までは何もかも破壊していたけれど、今となってはしようとは思わないもの。今、黒いあれを口に入れるなんて、考えもつかない。そんなことより、もっと有意義で生産的で合理的なことをしていたい。

「つまり、そーゆーことだよ」

バチコーン！ みたいな古臭い効果音がなりそうなウインクをかましてきた。

「だっさ」

いみわかんねえよ……とつぶやいてみたが、「そーゆーこと」だとわかってしまった。わからない方が幸せだったかもしれない。けれど生き抜くにはわかる必要があった。何がどうだったのかは結局分からずじまいだけれど。

「ま、金の卵を生むガチョウを殺すような真似は、絶対に二度としないことだね！ 自惚れさん！」

「一言余計だ！ 黙ってろ！」

たぶん、今の私は屈託のない笑顔を見せているのだろう。暗雲は消え去り、冬の快晴が広がっている。

私は、それから随分と良くなって、今は家族や周囲の人間との関係の改善に努めている。生き抜く上でそれが今最も必要だからだ。好意的に見えた妹も、実際私のことが嫌いなん

だろうなあ、と察した。なぜならばあの見慣れない鉢植えやアジサイ、シクラメンを見舞いの品として持ってきたのは彼女だからだ。仕方のないことだ、優秀な人材にはひがみも嫉妬もつきものだから。まあ良くもこんなに季節感のないものを持ってきたなど苦笑いしながらカーテンを開けた。黄色がかつた淡紅色が眩しい。そして妹からのありがたいプレゼントは玄関先に美しく飾った。白い壁に良く映える。せめてもの意趣返しだ。引越した先は東京都調布市の京王線調布駅まで徒歩十五分のマンションの二階だ。会ってほしくないけれど支援はしてくれるようになった親のおかげでなんとか就職して、新宿区のあるエンタメ事業の社長秘書アシスタントをしている。希望通りとまではいなくても、自分としては真っ黒な仕事でもなく万々歳なのだ。服装髪型自由といふかなりフレキシブルな職場だ。

いつか、親たちに「まとも」になった自分を見てもらえるように。妹に見返してもらえるように。知人にならなくなったね、と認めてもらえるように。モラトリアムな自分から抜け出して。普遍でありながら特殊な存在として、この世を生き抜いてやるんだ、と。

顔を洗って、整髪し、ジャケットとストラックスを纏って、私は今日も紅く染まりながら、モスグリーンの歯車の一部になってやろうじゃないか。

そして私は時間が存在する世界へ踏み出した。

※1 深成岩：火成岩の一種。マグマが地下の深くで低速で固まってできる

※2 等粒状組織：深成岩に見られる組織。ほぼ全ての結晶が他形である

※3 トライフォビア：小さな穴や斑点などに対する恐怖症

※4 同素体：同一元素から成るが、原子の配列や結合、性質が違う単体

※5 フレーラン：閉殻空洞状の多数の炭素原子のみで構成される、クラスターの総称

※6 カーボンナノチューブ：1991年に飯島澄男博士によって発見された炭素のみで構成されている直径ナノメートルサイズの円筒状の物質

※7 シュワルツロットゴールド：ドイツ連邦共和国の国旗

※8 リバーブ：音に残響音や反射音を加えることで、空間的な深みや広がり感を出すエフェクト

※9 ドップラー効果：波動の源と観測者との少なくとも一方が動いている時に観測者のとらえる振動数が源の発するのと異なる現象

※10 学的風化：化学反応により岩石が分解・溶解する風化

※11 造岩鉱物：地球上の大多数の岩石を構成する鉱物の総称